

松崎正和セミナー参加報告書

主 催	早稲田大学環境総合研究センター・地方議員研究会 共催
日 時	平成30年8月30日・31日
場 所	早稲田大学大隈記念タワー
テーマ	1. 地域ICT（情報通信技術）活用 2. 人口減少社会における発想の転換 ～横須賀市の事例から～
対応者 (講師)	早稲田大学環境総合研究センター 研究院准教授 永井祐二 早稲田大学環境総合研究センター 招聘研究員、前横須賀市長 吉田雄人
概 要	
<h3>1. 地域ICT(情報通信技術)活用</h3> <p>◆地域活性化につながるポイントシステム（健康・環境・商店街ほか）</p> <p><u>地域通貨の起源</u></p> <p>19世紀末にイギリスのロバート・オーウェンが始めた労働証券に発祥 1930年代の大恐慌時代の米国では・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大量の失業者と国家の財政赤字 ・社会秩序が蔓延して市民は将来に不安 <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">お金がしまい込まれて流通しない</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">地域内の相互支援手段として地域通貨が発生</p> <p><u>海外地域通貨事例；イサカアワー</u></p> <p>米国ニューヨーク州の北西部にある人口3万人の町 イサカ 現在では千人以上の個人会員と400の企業の参加の下、200万ドル以上の経済効果</p> <p style="text-align: center;"><u>地域経済の活性化</u></p> <p>イサカアワーは、地域の富を循環させることにより地域ビジネスを元気付け、新しい仕事をつくり出す。イサカアワーは、私たちの技能、時間、道具、森、畑、川などの本当の「資本」に裏打ちされている。</p> <p><u>日本の地域通貨（第一次地域通貨ブーム）</u></p> <p>1998年 草津市 「おうみ」 草津コミュニティ支援センター利用券 1999年 千葉市 「ピーナッツ」 商店街への地域通貨 2000年 高岡市 「ドラー」（ドラえもんから） ボランティアとセンターの各種サービスの交換 2001年 清水市 「E. G. G. S」（駅前、銀座、元気、ストリートの略） 商店主同士の助け合い</p>	

- 2004年 北九州市「環境パスポート」 環境配慮行動を地域通貨の価値として設定、市民の環境問題への取り組みの喚起と環境政策の効率化を試みる
- 2004年 市川市 「てこな」 子育て、福祉、介護、健康、安全等の地域課題に対して通貨を適用し、地域コミュニティの醸成を図る
- 2004年 小国町 「小国ポイント」 ワーキングホリデーをはじめとする、参加型・滞在型プログラムを通じて、都市生活者との交流を促進
- 2005年 名古屋市「EXPOエコマネー」 マイバック運動を中心に広がりを持たせている

日本の地域通貨（第二次地域通貨ブーム）

- 2016年12月1日現在全国で**669**件
北海道49、東北60、関東127、北陸・甲信越76、東海55、近畿111、中国・四国94、九州80、全国版17

地域通貨の日本的な発展

- 流通地域の経済活性化という意義を越えて・・・
- 非市場的で多角的価値を有する“ものやサービス”
○福祉・介護・育児 ○救助・街づくり ○環境・教育 などを評価付けし、**地域問題の解決**を図る。
- 地域の人々の安全と連帯感を造成しつつ、**地域コミュニティの再生**を図る。
- 地域の活動を促進できるのでは、と期待されことにより、**地域経済の活性化**につなげる。

◆WIN-WINの関係

《個人にとって》

NPOを資金援助すると同時に、商品を買うことができる。

これまでは、NPOに寄付するか、もしくは、商品を購入するかのどちらかの選択だったが、コミュニティウェイであれば、NPOを支援しつつ、なおかつ、受け取った同額の地域通貨を利用して商品やサービスを購入することができる。

《企業にとって》

地域通貨は、社会貢献とマーケティングを両立させ、しかも、事業成功報酬型のマーケティングツールになっている。

NPOの活動を支援しつつ、個人の手に渡った地域通貨は、商品・サービスの購入に利用されたときに、始めて価格の一部に含まれて支払われる。このとき、企業にとっては現金による収入が同時に発生しており、また、受け取った地域通貨も、割引として扱うのではなく、再び企業活動の中で利用していくことが可能。

《NPOにとっては・・・》

コミュニティウェイはファンドレイジングの新しい手法を提供している。日本における寄付の現状は、個人が4分の1、残りは企業が行っている。

しかし、個人の力がますます重要な役割を担うこれからの社会においては、一人ひとりの個人がNPOや社会貢献的な活動にどのような態度で接していくかが問われる。

コミュニティウェイの仕組みは、個人による寄付を奨励することにより、個人がNPOを支援し、個人が決定権を持つ社会への第一歩を踏み出すための支えとなる。

2. 人口減少社会における発想の転換 ～横須賀市の事例から～

◆2025年多死化社会の到来

- ・2025年には、団塊の世代が全員75歳以上の後期高齢者に
- ・その結果、5人に1人が75歳以上という超高齢社会になると予測
- ・これまで日本を支えてきた団塊の世代が、給付を受ける側に回るため、医療、介護、福祉サービスへの需要が高まり、社会保障財政のバランスが崩れる恐れ

◆「自分の最後」に対する市民意識

～横須賀市民アンケートから～

- ・自宅で最後まで(60.0%)、病院などの医療施設(15.4%)、老人ホームなどの施設(6.1%)

「自宅で最後まで」というのは、家族への負担や医療の面から実現は難しい

- ・延命治療について
希望しない(76.0%)、希望する(2.4%)

リビングウィルとは＝終末期医療における事前指示書

人生の最終段階(終末期)を迎えた時の医療の選択について事前に意思表示しておく文書(日本尊厳死協会)

- ・法的拘束力はない
- ・いちど延命装置をつけると外しづらい
- ・家族の葛藤

定期的にご家族で話し合い、書面に残し、いざという時にうろたえずに判断できることが大事

◆課題の解決にむけて

- ① 実際には、60%の市民は病院で亡くなる
⇒ 在宅での療養や看取りを希望する市民は多い
- ② 死亡者数数は4,592名から5,918名へ
⇒ 在宅での看取りが増加すると予想される

③ 限られた数の医師だけに頼れない

⇒ 在宅で看取れる体制を構築する必要性

目指した方向性

住み慣れた我が家で療養したいという方が、在宅の療養さらには看取りという選択ができるように、地域医療の体制づくりを進める



最後まで自宅で暮らせる『在宅療養の体制づくり』に着手

◆横須賀市における在宅療養への取り組み

① 在宅療養連携会議の発足

～多職種のみなさんが集まって課題を解決する会議～

《目的》

- ・市民が地域において安心して在宅療養生活を送れるよう、現場における医療関係者や福祉関係者等の連携を深め、関係機関のネットワークを構築する。
- ・医療、福祉の地域連携を推進するための具体的方法について検討し、連携システムを構築する。

② 市民のみなさんに在宅療養のことをお知らせする取り組み

- ・在宅療養シンポジウムの開催（年1回開催）
—在宅療養をテーマに基調講演とパネルディスカッション—
- ・出前トークの開催
—町内会、老人会、ボランティア団体や学習グループなどを訪問—
- ・広報よこすか特集号
—最期の時、あなたはどこで療養したいですか—
～在宅療養、在宅看取りという選択～
- ・在宅医についてのお知らせ
—市民便利帳と横須賀市ホームページに在宅医を掲載—

③ 多職種のための各種研修会の開催

～多くの研修やセミナーを開催し、在宅療養を支える職種の人材を育成～

- ・多職種合同研修会
- ・介護職のための医療セミナー
- ・医師のための在宅療養医療セミナー
- ・病院スタッフのための在宅医療出前セミナー

④ 開業医・病院の地域でのネットワークづくり

- ・在宅医療ブロック会議の開催
- ・医師会に在宅療養センター連携拠点を設置

⑤ 啓発冊子の作成

- ・在宅療養ガイドブック（横須賀市HPからもダウンロードできます）

◆横須賀市のもう一つの取組み

～新たに浮かび上がった課題～

- ・ 一人暮らし高齢者の増加
⇒ 65歳以上のうち約13%が単身世帯
- ・ 貧困世帯の増加
⇒ 一人暮らしの高齢者の役19%が生活保護受給
- ・ 無縁社会の広がり
⇒ 引き取り手のないご遺体が年間60体

自分の「没後」の不安

ひとり暮らしで、身寄りがなく、財産もない・・・

↓

- どんな葬儀をあげられるのか？
- どこに埋葬されるか？
- 財産の処分は？迷惑をかけるかも・・・

そんな、没後の不安を解消するためスタートした新たな事業！！

【エンディングプラン・サポート事業】

◎事業内容

葬儀・納骨・死亡届出人・リビングウィルという終活課題について、あらかじめ解決を図る事業。

◎対象者

一人暮らしで身寄りがなく、蓄えがない高齢者（収入や資産がある場合は、弁護士や司法書士を紹介）

※NHKニュース「おはよう日本」（2015.9.4放送）でも取り上げられた

以 上